

カントの「心の哲学」

KONDO, Shu / 近堂, 秀

(出版者 / Publisher)

法政大学文学部

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

Bulletin of Faculty of Letters, Hosei University / 法政大学文学部紀要

(巻 / Volume)

50

(開始ページ / Start Page)

51

(終了ページ / End Page)

70

(発行年 / Year)

2005-03-01

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00002924>

カントの「心の哲学」

近 堂 秀

はじめに

カントの批判哲学では、Seele (心、魂)、Bewußtsein (意識)、Geist (精神)、Gemüt (心性) 等の心的なものを指し示す言葉に、独特の重みが付与されている。この点について、まず指摘されなければならないのは、近代啓蒙思想の形而上学的な心理学からの影響である。¹⁾しかし、心についてのカントの洞察には、そうした哲学史的な意義以上のものが期待されるのではないか。実際、心と身体の関係をめぐる今日の言語分析哲学の議論の中で、カントが引き合いに出されることも決して少なくはない。²⁾しかも、その目的は、言語分析哲学に典型的な態度で古典的哲学を拒絶するためでもなければ、たんなるその反動として、哲学の伝統によってみずからの立場を権威づけるためでもない。むしろ、自由と決定論とはたして両立しうるものなのか、という哲学の根本問題が、カントの洞察を通してそこであらためて問い直されているのである。とすれば、言語分析哲学にとつて歴史的アプローチが無効であるとは、必ずしも断言できないであろう。

このような問題関心から、本稿では以下の手順にしたがって、「心 (mind)」の存在に対するカントの主張を「自」意識

(Selbstbewußtsein)」に関する論述の内に探ってみようと思う。まず、近年の英語圏における研究動向を踏まえて、現代の心の哲学とカントとの関係について概観する(一)。カントの見解は非唯物論的か、唯物論的か、あるいはそのいずれとも異なるか、という解釈上の論争点がそこで示されるであろう。次に、批判哲学の体系の中で心理学の位置づけを思想発展史的な観点から確認しつつ、非唯物論的解釈の問題点を指摘する(二)。最後に、『純粹理性批判』第二版の演繹論の中で展開されている自己意識論を検討したうえで(三)、唯物論に対して中立的な立場にたつものとして、カントの心の哲学の意義を明らかにする(四)。

一 ストロークソン以後の『純粹理性批判』解釈

周知のように、P・F・ストロークソンは、『純粹理性批判』をそこから心理学的要素を排除しつつ言語分析哲学的に解釈した³⁾。これに対して、K・アメリカス、P・キッチャー、A・ブルックが、むしろその心理学的要素を重視しながら、今日の心身問題とカントを結びつけて論じている。ストロークソンの解釈を手短に確認したうえで、『純粹理性批判』の新たな心理学的解釈を概観することから考察をはじめよう。

ストロークソンがとった解釈上の基本戦略は、『総合』という心理学的要素を完全に「素通り」して、カントの議論から観念性を払拭することである。この戦略にしたがって、『純粹理性批判』分析論の演繹論から自己意識の統一と客観性の分析的連関に対する論証が導き出されると同時に、弁証論の誤謬推理章に即してデカルトの自我論が論駁される。その要点は、おおよそ次のようなものである。

客観性を含意する重みのある意味での経験は、経験の自己帰属の可能性に対して要求されるような、経験がそれ自体に関して思考する余地を与える再帰性を、したがって経験が概念的・認知的要素を含むことを前提する。しかし、そのさい経験

の自己帰属のために、人格の同一性の基準は用いられない。つまり、経験主観が現在の意識状態や想起された意識状態を自己自身に帰属させるとき、「人格の同一性のいかなる基準も、その経験主観を指示する代名詞「私」を使用することを正当化するためには、要求されてはいない」⁴⁾。しかも、そうした基準のない自己帰属であっても、経験的に同定可能な主観への指示は現実的には失われない。——以上がストローソンの解釈である。それは、端的に言うならば、カントの自己意識論を代名詞「私」の意味論として再構成する試みであり、したがって行動主義的な解釈として特徴づけられるであろう。

このストローソンの試みを出発点とした『純粹理性批判』の心理学的解釈としては、さしあたり次の三つの立場が挙げられる。第一の立場が伝統的形而上学からの影響を重視するアメリカスの解釈、第二の立場が「総合」概念を機能主義的に理解するキッチャーの解釈⁶⁾、第三の立場が「統覚」概念の言語分析哲学的な意味を明らかにするブルックの解釈である⁷⁾。

(1) アメリカスの非唯物論的解釈

アメリカスは、ストローソンが示した演繹論と誤謬推理章の連関を手がかりとして、特に誤謬推理章の中にカントの形而上学へのコミットメントを指摘する。つまり、前批判期の『形而上学講義L』に見出される魂の実体性や単純性の証明は、ヴォルフ学派からの多大な影響がそこに認められるが、批判期後半に至っても明示的に論駁されてはいない。とりわけ『純粹理性批判』第一版の誤謬推理章では、あくまでその実体性の基礎づけが不可能であることが示されるのみで、それはむしろ心の非物質性の見解として理解される、というのである。第一誤謬推理と第二誤謬推理に対するアメリカスの評価は、次の通りである。すなわち、魂の単純性に関する第二誤謬推理では、魂の非物質性への主張が制限されておらず、それに對する明確な反論も提示されていない。さらに、魂の実体性に関する第一誤謬推理では、「カントの引き合いに出した議論には、論証的に妥当しないものは何もなく、その結論の「適用は確かに許容されている」とまで言われている」⁸⁾。

前批判期から批判期への移行の複雑な過程と、第一版の誤謬推理の証明としての曖昧さの背後には、自由の問題が存して

いる。このように推定したうえで、アメリカスが最も批判主義的な見解と考えるのは、英知的な非唯物論という心の形而上学である。この形而上学的な見解について、デイヴィッドソン、パーフィットやペリー、シュレーマイカー、チザム、マツギンらの見解との比較検討によって、カントの独自性が際立たせられていく。

(2) キッチャーの唯物論的解釈

一方、キッチャーは、ストローソンが無視した「総合」概念をむしろ積極的に解釈して、超越論的心理学としての意義をそこに見出す。カント自身の総合概念の定義に注目したキッチャーは、それを次のように理解する。すなわち、総合とは、「二つの作用、あるいはより中立的には、表象を産出する過程」⁹⁾である。つまり、「異なる認知状態が含まれている多様な要素を、その認知状態からさらに後のその要素を含んでいる状態の中で、付け加えたり結合したりする」ことである。¹⁰⁾したがって、総合には心の因果性が含まれており、それによって一連の物的状態から異なる物的状態が産出される一方で、一連の心的状態から異なる心的状態が産出される、と解釈されるのである。いささか素朴な人たちではあるが、ここには認知内容を機能として捉える機能主義が認められる。そして、この機能主義に基づいてヒュームの人格概念の不整合を修正する「心的統一 (mental unity)」¹¹⁾を主張するのが、超越論的心理学なのである。

ただし、キッチャーの解釈では、自「意識の統一や自発性といったカントの「統覚」概念の核心が抜け落ちている。つまり、統覚の超越論的な意味がすべて現象的な自我へと還元されているのである。結局、いわゆる「自然化」されたカントにとって、感性および構想力と悟性との区別や超越論的な観念性にもはや本質的な意味はない。¹²⁾この解釈はそれゆえ、カントの自「意識論を唯物論的に読み替える試み、ということになるであろう。

(3) ブルックの中立的解釈

キツチャーの唯物論的な解釈に対して、カントの自己意識論を存在論的には中立的なものとして維持しようとするのが、ブルックの解釈である。ブルックは、シュューメイカーの自「言及性」に関する言語分析的考察を援用しつつ、いわばハードウェアの本質から独立に考察される自己意識の特有性を明らかにする。それは、以下の二つのステップからなる。①われわれは、主観を「超越論的に」指示するとき、「その固有性に些かも気づくことなく」(A355) 主観を意識する。それゆえ、②自己の帰属的意識、自己自身の固有性としてその性質を意識することは、自「自身としてたんに自己を意識すること、つまり自己の非帰属的意識としての自己意識について、これを「前提する」(カント)、あるいは「潜在的に可能なもの」(シュューメイカー)にする。①については、自己の性質としての何らかの自己を意識するために、その性質を意識することから独立した仕方で自己を意識しなければならない、とする「ネーゲルⅡカスターニエーダⅡシュューメイカー論証」によって支持されている。この論証の一種が、②の主張にあたつてカントによつても用いられたのである。¹³⁾

ブルックはさらに、こうしたきわめて特殊な自己意識が与える統一こそカントの統覚概念にほかならないとして、それを「包括的表象 (global representation)」として特徴づける。この表象は、様々な志向的な表象を「唯一の包括的客観 (single global object)」として含む、「表象的基盤 (representational base)」とも呼ばれるべきようなものである。¹⁴⁾ キツチャーは、カントの統覚概念を自己意識の通時的な統一として切り詰めることによって、時間を越えた一つの心として人格の同一性を基礎づけようとした。しかし、それはむしろ、自「己意識の共時的な統一であり、多くの表象を同時に意識する人格の同一性に関わるものでなければならぬ。——ブルックは、このように解釈する。

以上が『純粹理性批判』の心理学的解釈の三つの立場である。アメリカスは、機能主義とは一定の距離をとる非唯物論に、カントの心の形而上学を位置づける。ところが、キツチャーは、カントの自「己意識論から機能主義を取り出すことによって、

それを唯物論へと限りなく接近させる。その一方で、ブルックは、キツチャーが「素通り」した統覚概念に、中立的な意味を認める。カント自身の心の哲学は一体、いずれの立場を支持するのであろうか。

二 批判哲学の反心理学的な思想展開

カントはそもそも、心理学に対してどのような態度をとっていたのであろうか。当時の心理学は、今日の心理学とは全くかけ離れた、靈魂論とも呼ばれうるようなものである。この点をあらかじめ注意しながら、心理学と批判哲学の体系の關係から確認していこう。

『純粹理性批判』方法論の中では、合理的心理学と経験的心理学とに二分されたうえで、心理学が次のように体系的に位置づけられている (Vgl. B875ff.)。『合理的心理学 (psychologia rationalis)』は『合理的物理学 (physica rationalis)』とともに、全形而上学の体系の一部門である内在的な『合理的自然学 (rationale Physiologie)』を構成する。この合理的心理学と合理的物理学との区分は、それぞれ内的感官と外的感官に対応している。つまり、物理学が物体的自然を対象として『物質 (Materie)』の概念から成立するのに対して、心理学は「心 (Seele)」または「思考する自然」を対象として「思考する存在者」の概念から成立するのである。他方、『経験的心理学 (empirische Psychologie)』は、応用哲学としての『経験的自然論 (empirische Naturlehre)』の補足物である「人間学 (Anthropologie)」に属し、形而上学からは除外されるが、その重要さゆえに「エピソードとして」[ささやかな場所]が許されている。ところが、『自然科学の形而上学の原理』序文で自然科学が厳密に定義される中では、心理学の位置づけがより消極的なものになっていく (Vgl. IV, 471)。そこではもはや合理的心理学について言及されず、『経験的心理学 (empirische Seelenlehre)』が本来的な『自然科学 (Naturwissenschaft)』としての物体論から区別されるのみである。というのも、内的感官の現象とその法則には数学の適用が不可能であり、内的

観察は分析技術や実験に適當ではない、と考えられているからである。結局、心理学は、経験的な学として、「史的自然論 (historische Naturlehre)」のうちの「心の自然記述 (Naturbeschreibung der Seele)」であるにとどまり、「心の科学 (Seelenwissenschaft)」や「心理学的実験論 (psychologische Experimentallehre)」の可能性が否定される。さらに、こうした心理学の消極的な位置づけは、人間学の領域にまで徹底される。「実用的見地における人間学」の冒頭で、人間の自己観察には「重大な困難」がつきまとうことから、「生理学的 (physiologisch)」な人間学もまた放棄されるのである (Vgl. VII, 120f.)。

このようなカントの心理学に対する消極的な姿勢はまず、『純粹理性批判』弁証論における合理的心理学批判との関係から理解されなければならないであろう。理性批判ないしは超越論哲学を通じて、「私は思考する」という命題を唯一の「原典」とする合理的心理学はいかなるアプリオリな総合的認識をもたらずのものでもない、と帰結される。さらに、経験的心理学は、自然科学の方法が適用できないゆえに、合理的物理学が自然科学として自然の形而上学の一部門を構成する一方で、心の自然記述に制限されるのみなのである。確かにカントは、理論哲学的には、心それ自体について不可知論の立場にたつ一方で、心的現象から自然科学の対象という身分を剥奪しているように思われる。自由な行為を可能にする心の能力という実践哲学の見解をこれに直結させるならば、アメリクスの言うように、歴史的なカントは徹底した英知的な非唯物論者ということになるかもしれない。ところが、心を非物質的なものとしたうえでそこに自由を認める、という合理的心理学的な見解に対するカントの思索の変遷は、実際にはさらに複雑な過程を経ているのである。

思想発展史的には、H・クレメにしたがって、以下のようにまとめられるであろう。¹⁵⁾ 18世紀のドイツでは、ヴォルフ学派の合理的心理学の領域で、「演繹的『三段論法的モデル』」として特徴づけられるような、「魂 (Seele)」の本質の概念的な認識が試みられていたが、その一方でその経験的心理学の領域では、ビュフォン、ルソーとボネ、フレーゲルをその三つのヴァリアントとする「分析的『観察的モデル』」の影響から、魂の現実存在の直覺的な認識が主張されるようになっていった。

70年代のカントもまた、経験的心理学ないしは人間学の領域で分析的・観察的モデルの方法を用いた。それによって、魂の自己直観に基づいて自由かつ単純で非物質的な実体として自己自身が認識される、と考えられていたのである。その一方で、『形而上学講義Ⅰ』の合理的心理学では、総合的方法にしたがって、自己意識の統一から導出されるべきカテゴリーが、現存するものとして前提されている魂へと適用されていた。ところが、経験的心理学と合理的心理学との区分は直観的認識と論弁的認識との間の方法的水準に対応するのだが、特に自己直観に関して一つの矛盾が生じてくる。カントはこの時点で、感官のみが直観する、というテーゼと、自己自身の直観は悟性または統覚の反省に基づく、というテーゼの間で理論的な不整合に陥っているのである。結局、批判期には「私は思考する」という命題に新たな意味を与えた自己意識論によって、合理的心理学の証明が斥けられると同時に直観的な自己認識もまた放棄されるのだが、こうした主張は批判期後半にさらに徹底されていく。『純粹理性批判』第一版の合理的心理学は、まだカテゴリーを導きとして申し立てられている。しかし、その第二版ではそれが、判断機能とカテゴリーの関係の新たな規定が——『実践理性批判』の中で自由のカテゴリーが自然のカテゴリーと区別されるのと並行して——確立されることを経て、論理的な判断機能によってはたされるようになる。ところが、この判断機能をもつてしては、魂の客観化はもはや不可能なのである。

ところで、アメリカスの解釈もまた思想発展史的な方法に依拠しているが、クレメによってその多くが否定されることになる。とりわけ決定的なのは、合理的心理学と経験的心理学の体系的な区分に関わる自己直観の問題について、第一版の誤謬推理の証明としての妥当性の問題について、そして第一版から第二版への書き換えの問題について、これら三つの論点であるが、¹⁶⁾ここでは証明の妥当性問題に絞ってさらに検討しておこう。

その表象がわれわれの判断の絶対的な主語であり、それゆえ他の物の規定として使用されえないようなものは、実体である。

私は、思考する存在者として、すべての私の可能的判断の絶対的な主語であり、だから私自身についてのこの表象は、何らかの他の物の述語としては使用されえない。

それゆえ、私は、思考する存在者（魂）として、実体である。（A348）

この三段論法は、『純粹理性批判』第一版の魂の実体性に関する第一誤謬推理である。カント自身が述べていることであるが、その誤謬は、実体のカテゴリーが大前提では超越論的に使用されているのに対して、小前提では経験的に——しかも、対応する直観があらかじめ与えられていないという、許容されないような仕方で——使用されていることに存する（Vgl. A403）。つまり、この推理には、「絶対的な主語」＝「実体」というカテゴリーの超越論的使用と「思考する存在者としての私」＝「すべての内的経験の対象」＝「絶対的な主語」としての「実体」というカテゴリーの経験的使用が同時に含まれているのである（Vgl. ibid.）。クレメはこの点を適切に指摘しているが、アメリカスは特にそれに言及しないままに、形式的には妥当すると断定している。この推理にはさらに、超越論的对象の概念との関係もうかがわれ、書き換え問題の論点と重なってくるのだが、アメリカスはこの点にも踏み込んでいない。批判哲学は、『純粹理性批判』第一版から第二版へと書き換えられるその形成過程の中で、対象としての心を理論哲学の領域から完全に締め出していった。それは、認識と思考の区別の徹底を、さらに現象と物自体の二元論の徹底を意味している。したがって、カントにとって心は非物質的である、とするアメリカスの解釈には、物自体の思考可能性に多くを読み込みすぎるゆえに、疑問を感じざるをえないのである。

以上の検討によつて、アメリカスの解釈は、批判哲学の体系とその展開を十分に捉えてはいないことが明らかとなった。同様の観点から、キツチャーの解釈のようにカントを完全に唯物論へと還元することにも、ただちには賛同できないであろう。さしあたりブルックの解釈が、ここで残された選択肢ということになろう。そこで注目されるのが、経験的心理学に許された「ささやかな場所」である。

三 第一版演繹論における心理学的要素の意味

経験的心理学的要素が散見されるのは、「純粹理性批判」第一版の演繹論の三重の綜合に関する論述 (Vgl. A98-110) である。やや長くなるが、まずその論述の概略を見ておこう。

すべての経験の可能性の制約を含むとともに他の心の能力から導出されない三つの根源的源泉、心 (Seele) の可能性ないしは能力とは、アプリオリな多様を通観する「感官 (Sinn)」それを綜合する「構想力 (Einbildungskraft)」さらにそれを統一する「統覚 (Apperzeption)」である。さて、あらゆる直観には把握の純粹綜合が、把握の綜合と不可分に結合している再生の綜合からは構想力の純粹な超越論的綜合が、それぞれその根底に存している。しかし、概念が基づく一つの意識こそ、多様なもの、順次直観されるもの、次いで再生されるものを一つの表象のうちへと合一させるものである。一方、認識の対象はあるもの一般 $\parallel X$ としてのみ思考されるが、認識と対象の連関の必然性ゆえに、対象 $\parallel X$ が必然的なものとなる統一は形式的な意識の統一でなければならない。つまり、あらゆる必然性の根底に存する超越論的制約は、超越論的統覚という意識の統一なのである。したがって、超越論的対象 $\parallel X$ は純粹概念として「すべてのわれわれの経験的概念一般に対象との連関を、つまり客観的實在性を与えうる」が、その連関は「意識の必然的統一以外の何ものでもなく、したがってまた、多様なものを一つの表象の内で結合する、という心性の共通の機能による (durch gemeinschaftliche Funktion des Genius) 多様なものの綜合の必然的統一以外の何ものでもない」。かくして、対象との連関、つまり経験的認識の客観的實在性は、「超越論的法則」に基づくこととなる。

このきわめて晦渋な論述から読みとられるのは、次の三点である。第一に、そこで議論の前提となっている経験的心理学は、厳密に言うならば、表象との結びつきの中で心の能力を分析する能力心理学である。第二に、能力心理学を下敷きにし

61 カントの「心の哲学」

たまさに超越論的と呼ばれるべき心理学から、超越論的統覚という概念が導き出されている。第三に、超越論的心理学は、純粹悟性の概念すなわちカテゴリーの客観的実在性を証明する一つのステップとして、経験的認識の可能性を示すものである。

まず第一点目についてであるが、カントが根源的な心有能力として感官、構想力、および統覚を挙げていること、さらにそれぞれが直観と概念という表象の論理学上の区別に対応していることから、容易に理解できるであろう。ただし、それらの表象があくまで純粹な総合とその統一として考察されていることには、注意を要する。ここにカントの能力心理学の特徴があらわれているのだが、それは第二点目とも関係する。経験的心理学的 $\parallel$ 能力心理学的な要素の根底には、意識の統一が存している。ところが、超越論の対象 $\parallel$ X が経験的概念一般に与える客観的実在性としての対象との連関は、そうした意識の必然的統一にはかならない、とカントは結論づける。したがって、先の論述での心理学的な考察はあくまで、超越論的な意味でのものである。第三点目については、経験的認識の客観的実在性が基づく超越論的法則の具体的内容を確認する必要がある。カントの説明は以下の通りである。

すなわち、すべての諸現象は、われわれにそれらを通じて諸対象が与えられるべきかぎり、そうした諸現象の総合的統一のアプリオリな諸規則にしたがわなければならない、この諸規則にしたがってのみそれらの諸現象の関係が経験的直観の内可能であるということ、換言するならば、それらの諸現象は経験の内、単なる直観における空間と時間という形式的制約と同様に、統覚の必然的統一の諸制約にしたがわなければならないということ、否、この統覚の必然的統一の諸制約によつてのみ、先のあらゆる経験的認識がはじめて可能となるということ、である。(A109f.)

ここで言及されている現象の総合的統一のアプリオリな規則とは、カテゴリーを意味している。ところが、そのような規則

にしたがった統一はまた、多様なものを一つの表象の内で結合する、という心性の共通の機能によるものであり、したがって意識の必然的統一にはかならない。それゆえ、カテゴリーの根拠としての意識の統一である超越論的統覚によって、経験的認識が可能になる、というのがカントの主張なのである。こうした意識の統一を導き出すのが超越論的心理学であることは、先に指摘した通りである。

とりわけ興味深いのが、第二点目であろう。カント自身が述べているように、超越論の対象にとって必然的な統一は形式的な意識の統一、すなわち超越論的統覚でなければならない。ところが、このことから、統覚を包括的表象として特徴づけるブルックの解釈の妥当性が裏づけられるように思われるのである。さらに、第三点目に挙げた認識論的な意味と関係づけて検討しよう。

認識論の観点からは、D・シュトゥルマが『純粹理性批判』の心理学的要素の原理的な意味を明らかにしている。⁽²⁰⁾ シュトゥルマによると、与えられたものと思考されたものとの構造的な差異は、カントの客観概念が無効であることを示している。ストローソンが前提する経験的概念的・認知的要素についても、空間と時間における一つの客観という感覚論的には完全に記述されない概念と感覚論的な与件の継起との間の認識論的な差異化に対する異議申し立てには、答えられてはいない。そこでシュトゥルマは、カントにおける自己意識の主観を「自己言及的カテゴリー総合 (selbstreferentielle kategoriale Synthesis)」⁽²¹⁾ として、その客観を自「意識の志向的な相関概念に固有な「疑似客観 (Quasobjekt)」⁽²²⁾ として、それぞれ解釈する。この疑似客観という概念によって自「意識は、指示者として、経験の可能的対象の概念的ステイタスをもたずに、差異化ないしは客観化の遂行に結合される。それゆえ、論理的な自己意識である思考の主観は、疑似客観としてみずから思考するが、これによって思考の主観の経験の内にはその意識の非経験的な事例が存在することとなるのである。

このシュトゥルマの解釈を援用するならば、包括的表象としての統覚というブルックの解釈が、超越論的統覚が超越論的対象によって与えられた対象との連関を根拠づける意識の統一である、とするカント自身の見解に即したものであることが

明らかになる。すなわち、自己意識が疑似客観として唯一の包括的客観を含意するならば、この意識の統一こそまさに、カントの超越論的統覚の概念を言い当てているものにはかならない。シュトゥルムとブルックの解釈は、この点で一致すると見てよい。²⁴⁾さらに、両者が志向性の概念を用いて説明していることも、加えて指摘しておく。ただし、主観概念については、ブルックはただちにそこに人格性を認めているが、シュトゥルムはあくまで——超越論的統覚の解釈としてはオーソドックスに——論理的な自己意識に限定して考察をすすめている点で、議論が分かれている。これについてはおそらく、両者がやはり一致して挙げている主観の自己言及的な構造によって解決できるように思われるが、特に人格の同一性との関係に關しては検討の余地が残る。

四 超越論的認識と内在的實在論

これまでの検討によって、カントの自己意識論から心の哲学としての意義を引き出す準備が整ったであろう。最後に、三重の綜合に關する論述に即して、心の存在に対するカントの主張を明らかにしよう。

第一の主張は、知覚理論の認知心理学的な転回である。三重の綜合に關する論述についてこれまでにさまざまな解釈上の問題が指摘されているが、シュトゥルムによるとそれは、カントが認識批判の理論的な枠組みの出発点として感覚と件論的な立場を用いている、と見なされうる。要するに、能力心理学的に再構成された知覚理論からカント独自の超越論的心理學への転回点が、経験的心理學に許された「ささやかな場所」なのである。この転回は、みずからの反心理學的な立場を譲歩したストローソンの言葉（²⁵⁾）を借りるならば、このように表現されうる。すなわち、「われわれの意識的な知覚経験の継起状態は全く、因果的能力をもった持続的な客観という概念を使用することなくしては、正確には特徴づけられないようなものである」が、こうした意識の内的な操作は、外的な物的状態に対して、認知心理學的な「情報加工 (information-processing)」

と考えられる、ということである。⁽²⁶⁾

第二の主張は、機能を媒介とした心的現象と物的現象の統一である。三重の綜合に関する論述の中では、機能によって超越論的対象が超越論的統覚へと内在化されている。もちろんそこで言われている機能という概念は、「種々の諸表象を一つの共通の表象のもとで秩序づける働き」の統一（B103）とあらかじめ定義されており、ただちに機能主義に結びつけられうるようなものではない。しかし、ブルックとシュトゥルムに依拠しつつ、自己を疑似客観と見なしたうえで、それを通じて唯一の包括的客観を与える意識として、すなわち包括的表象として超越論的統覚を解釈するならば、機能主義的な意味をそこに認めることも可能ではないであろうか。要するに、カントはここで心的現象と物的現象を機能によって統一的に理解しようとしていた、ということである。これに付け加えるならば、純粹悟性概念の客観的實在性の証明は最終的に、可能的判断の述語、直観における多様なものの綜合的統一、統覚の根源的・綜合的統一を機能の同一性によって媒介することではたされる（Vgl. B104f. B143）。つまり、機能という概念には論理的なもの、客観的なもの、主観的なものの統一が含意されている。したがって、意識の統一とは、判断および物的状態と心的状態との統一を指し示すものにはかならないであろう。実際、キッチャーが綜合概念に機能主義的な意味を見出しているが、むしろ統覚の綜合的統一という概念のほうが、カント自身の見解をより積極的に展開することになるであろう。この統覚概念の機能主義的な意味は、唯物論的な説明を課せられずに唯物論と両立しうる点でも注目値する。

第三の主張は、心の志向性に関する内在主義である。判断、物的状態と心的状態の統一としての超越論的統覚には、やはりブルックとシュトゥルムが指摘しているように、心の志向性が含意されている。カント自身、「自発性」（B75）という言葉でそれを表現していた。そもそも、カントの超越論的認識とは、対象一般についてのアプリアリな心の志向性を認識することを目指したものであった。

私は、対象ではなく、むしろ対象一般についてのわれわれの認識様式——それがアプリアリに可能であるべきかぎりで——に関わるすべての認識を、超越論的と名づける。(B25)

このことに留意するならば、超越論的統覚が経験的認識を可能にする、すなわちその客観的実在性を根拠づける、とするカントの論述には、興味深い論点が含まれていることが理解されるであろう。経験的認識の客観的実在性は、超越論的統覚が超越論的対象をその内に含む意識の統一であることに基づく。超越論的統覚とはそれゆえ、内在的な心の志向性を意味しているものであり、こうした統覚概念によつて同時に、外在的なものを必然的に指示する心的な表象が存在しなければならぬ、とする実在論的な真理の対応説が斥けられる。したがって、カントがここでH・パトナムの言うところの内在的実在論⁽²⁷⁾を主張している、と考えられるのである。しかも、パトナム自身の主張には、批判されている当の外在主義的な形而上学的実在論に依拠してのみ内在的実在論の見地になてゐるのではないか、という疑問が投げかけられているが、それを回避するような証明をカントの論述から再構成しうるように期待される。さらにこの論点を、超越論的論証をめぐる一連の論争の中でR・ローティが下した否定的な診断に対するD・ヘンリッヒの応答——論理学や認識論と人格概念という核心との結合——と結びつけて考察することも可能であろう。ここでは示唆するにとどめるが、パトナムの「水槽の中の脳」に関する議論の不分さをカントの観念論論駁の議論によつて補おうとする試みは、⁽²⁸⁾以上のようなカントの主張を含めることで、つまり人格と連関すべき超越論的統覚という概念に訴えることで、一層説得的なものになるのではないであろうか。いずれにせよ、心の志向性に関する内在主義というカントの主張は、より広い問題圏域の中で検討されるべき課題ということになる。

おわりに

歴史的なカントは、その哲学体系全体から判断するならば、単純に唯物論に与することはないのであろう。つまり、批判哲学とは、あくまで超越論的観念論の立場にたつものである。とはいえ、カント自身が強調するように、それはまた同時に経験的實在論でなければならない。唯物論に大きく傾斜した現代の心の哲学に批判哲学を結びつける可能性が、ここに見出される。本稿での考察が明らかにしたように、カントの心の哲学では、非唯物論的な心それ自体の実体性が徹底的に排除されると同時に、決して不可知論に陥ることはなく、心の存在が超越論的に認識されている。この超越論的認識に基づく自己意識論は、いわば認知心理学的な転回を通じて、機能を媒介として心的現象と物的現象を統一したうえで、心の志向性を内在的に位置づけるものである。もちろん、こうしたカントの主張が現代の心の哲学にとつてどれほどの価値をもつか、という疑問には、まだ十分答えられていないであろう。しかしながら、カントの論述過程を辿ることを通じて、何らかの示唆をそこから汲み出すことは依然として可能であるように思われる。本稿での考察を手がかりとして、具体的にデイヴィッドソンやパトナム、ローティなどの主張とカントの主張とを比較検討することが、今後の課題ということになるであらう。

註

カントからの引用箇所については、慣例にしたがって『純粹理性批判』の原版第二版をB（第一版のみの箇所はA）として頁数を表記し、他のすべてアカデミー版の巻数と頁数で示した。

- (1) 近代啓蒙思想の心理学と批判哲学の關係については、次の拙論を参照。「心の存在と非存在——近代啓蒙思想の「二つ」の学——」、『理想』第六七二号、理想社、二〇〇四年。
- (2) とりわけデイヴィッドソンとカントの關係について、詳細な研究がすすめられている。それは、デイヴィッドソン自身が非法則論的一元論をカントの自由論と結びつけていることに起因するのかもしれない。ただし、両者の決定的な相違点もまた数多く指摘されている。この点については、次の文献を参照。O. Höffe, *Kants Kritik der reinen Vernunft. Die Grundlegung der modernen Philosophie*, München 2003, S. 234ff. W・エルトル「自由と決定論をめぐるカントとデイヴィッドソンの対立——非法則論的一元論としての超越論的観念論?——」、『現代カント研究』9 近代からの問いかけ——啓蒙と理性批判——カント研究会編、見洋書房、二〇〇四年。
- (3) Vgl. P. F. Strawson, *The Bounds of Sense. An Essay on Kant's Critique of Pure Reason*, Methuen & Co.Ltd. 1966. 【意味の限界】熊谷直男、鈴木恒夫、横田栄一訳、勁草書房
- (4) Strawson, *ibid.*, p. 165. (前掲訳書、一八八頁)
- (5) Vgl. K. Ameriks, *Kant's Theory of Mind. An Analysis of the Paralogisms of Pure Reason*, New Edition, Oxford 2000. なお「アメリカスに依拠した誤謬推理章の解釈としては、次の文献を参照。美濃正「ロックとカント」、『講座ドイツ観念論——ドイツ観念論前史』、弘文堂、一九九〇年。
- (6) Vgl. P. Kitcher, *Kant's Transcendental Psychology*, Oxford 1990.
- (7) Vgl. A. Brook, *Kant and the Mind*, Cambridge 1994.
- (8) Ameriks, *ibid.*, p. 67.
- (9) Kitcher, *ibid.*, p. 74.
- (10) Kitcher, *ibid.*
- (11) Kitcher, *ibid.*, pp. 117ff.
- (12) Vgl. H. E. Allison, *On Naturalizing Kant's Transcendental Psychology*, in: Allison (ed), *Idealism and Freedom: Essays on Kant's Theoretical and Practical Philosophy*, Cambridge 1996.
- (13) Vgl. Brook, *ibid.*, p. 76.
- (14) Vgl. Brook, *ibid.*, pp. 31ff.; pp. 119ff.

- (15) Vgl. H. F. Klemme, *Kants Philosophie des Subjekts: Systematische und entwicklungsgeschichtliche Untersuchungen zum Verhältnis von Selbstbewußtsein und Selbsterkenntnis* (Kant-Forschungen, Bd. 7), Hamburg 1996.
- (16) Vgl. Klemme, *a. a. O.*, S. 118ff.; S. 271ff.; S. 312ff.; S. 316ff. など。クレーメの批判に対して、アメリカス自身が反論を試みてゐる。
- (17) Vgl. Ameriks, *ibid.*, xxiii-xxx.
- (18) Vgl. Klemme, *a. a. O.*, S. 314.
- (19) Vgl. Ameriks, *ibid.*, pp. 66f.
- (20) Vgl. D. Sturma, *Kant über Selbstbewußtsein. Zum Zusammenhang von Erkenntnistheorie und Theorie des Selbstbewußtseins*, Hildesheim 1985.
- (21) Sturma, *a. a. O.*, S. 45.
- (22) Sturma, *a. a. O.*, S. 90.
- (23) R・アクイーラが画者の概念を用ゐながら、二重の綜合に関する論述を現象学的に解釈してゐる。Vgl. R. Aquila, *Transcendental Unity as a "Quasi-Object" in the First Critique*, in: *Proceedings of the Eighth International Kant Congress*, Memphis 1995.
- (24) この点については、次の文献を参照。H. Vaihinger, *Die transzendente Deduktion der Kategorien*, Halle a. S. 1902; N. K. Smith, *A Commentary to Kant's 'Critique of Pure Reason'*, New York 1918, pp. 203ff. 牧野英一『「カント純粋理性批判」の研究』、法政大学出版局、一九八九年、一二二頁以下。
- (25) Vgl. P. F. Strawson, *Sensibility, Understanding, and the Doctrine of Synthesis: Comments on Henrich and Guyer*, in: E. Förster (ed), *Kant's Transcendental Deductions*, Stanford 1989.
- (26) Vgl. Strawson, *ibid.*, p. 76.
- (27) Vgl. H. Putnam, *Reason, Truth and History*, Cambridge 1981. (『理性・真理・歴史』野本和幸、中川大、三上勝生、金子洋之訳、法政大学出版局)
- (28) 加藤泰史「『観念論論教』のコンテクスト」、『現代カント研究』、超越論的批判の理論』カント研究会編、見洋書房、一九九九年、一―三頁以下を参照。
- (29) ヘンリッヒ、アーベル、ローティ他『超越論哲学と分析哲学』、竹市明弘編、産業図書、一三頁以下および六九頁以下を参照。

69 カントの「心の哲学」

(30)

加藤、前掲書、一二四頁以下を参照。

Kants Philosophie von ‘mind’

Shu KONDO

In dieser Abhandlung wird die besondere Bedeutung des Selbstbewußtseins und der Seele in der Kantischen Erkenntnistheorie erklärt. Auf den Satz: Ich denke, einerseits begründete Kant eine Theorie der Erfahrung, andererseits leugnete er die rationale Psychologie. Über diese Argumentationen sind drei Interpretationen vorgelegt, welche die Behauptung der Kantischen Erkenntnistheorie und ‘the philosophy of mind’ in Übereinstimmung bringen mögen. Erstens nach Ameriks wird Kants Metaphysik der Seele als der Immaterialismus bezeichnet. Zweitens aber behauptet Kitcher die Reduktion der Theorie des Selbstbewußtseins auf den Materialismus. Drittens versucht Brook noch die Beziehung zwischen Subjekt und Objekt in dieser Theorie als etwas Neutrales, d. i. intentional zu verstehen. Es ist unklar, ob Kant ein Materialist war oder nicht. Nach der systematischen und entwicklungsgeschichtlichen Ansicht ist es zwar aufgezeigt, daß in Kants Kritik die Seele und die Psychologie nur negativ behandelt wurden. Aber in der transzendentalen Deduktion A kann eine kognitionswissenschaftliche Wende der empirischen Psychologie doch gefunden werden. Daraus folgt, daß Kant durch die transzendente Erkenntnis ‘internal realism’ darstellt.